

## 退会は、すべて悪いことですか？

入会を上回る退会  
もったいない退会をなくすため  
堂々たる卒業生なくして  
若返りの方策は急務

2011年3月15日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

### 入会を上回る退会者数

東日本区では、2009-2010年度、172人が入会し、127人が退会しました。年度内に設立したクラブもありますから、既存クラブだけで見ると、入会61人、退会113人となっています。これは大変なことです。以前は、国際本部から半年報で要求される入会と退会のプラスマイナスの差だけしか集計していませんでしたから、見えない部分がありました。退会を限りなくゼロにしたいと思うのは当然です。

だからといって、退会をゼロにすることはできないのです。これは、「任意入会・任意退会」というクラブの任意（自発）性の原則、人間はだれしも弱るものだという原理に反するからです。

思わず、「ザルで水をすくうようだって、いいじゃない。それで、ザルがきれいになるなら」と、乱暴なことを言ったら、他クラブの親しいメンバーから「オレたちがどれだけ苦労しているか、分かっているんですか」と、涙を流さんばかりに抗議されました。彼が、退会を申し出たメンバーに言葉を尽くし、メネットをも説得して、思いとどまらせたことも知っていましたから、怒らしたことは本当に悪かったと思いました。それでも心のうちは、天文学者・ガリレオ・ガリレイと同じ、<それでも、人は動く>でした。本当は、お互いに、自然減などはやむを得ないという点では一致していたのですが。

出来ないことを目標に掲げて、ダメだったとい

うよりも、出来ることを目標に頑張った方がやる気がでると思うのです。そうしないと問題点も見えてきません。

またまた、教会の話で恐縮ですが、私の教会で、牧師不在の13カ月間がありました。一番困るのは、会員の葬儀でした。司式は、他の教会の牧師にも依頼できますが、前後の対応がどうしても行き届かないからです。当時、教会には年配の婦人が大勢おりました。

「どうか、1年間は死なないでください」

「なんとかがんばってみますが、ダメだったらごめんなさい」などという会話を交わしていました。幸い1年間は、葬儀はなくてすみましたが、新しく着任した牧師は大変でした。こういうことは、ある期間では辻褄があってしまうものです。

私も若い頃は、<最後のときがきたら、ワイズソングに送られて・・・>とっていました。それなりの歳を重ねると、そうはいかないことが分かってきました。本人がいくらクラブに残りたいと、工夫し、努力しても解決できない、健康的、経済的、時間的、家庭的、距離的などの事情があるのです。加えて、ご本人の、「どうしても勉強をし直したい」とか、「ある奉仕活動に金と時間を重点的に傾注したい」と言われれば、これを覆すことはできません。

もうひとつ、避けては通れない、退会せざるを得なくなる場合があるのです。

1963年、チャーターメンバー55人でスタート

した熱海クラブは、1年後に19人を退会させました。3回連続して例会を欠席したためです。「小さな地方都市では中途半端な考え方でクラブは存在し得ない」と考えたからです。当時、同クラブのメンバーだった竹内敏朗さんは、「毎日、市内で顔を合わせている人だし、失いたくない優れた人材が多かった。しかし、クラブは互いにルールを厳しく守ることが必要だと思い、決断した。同時に新しいメンバーの獲得に努めた」と語っています。

さまざまな人間関係、職業上のしがらみもあったでしょうが、原則に則ったところに、その後の熱海クラブ、富士山部があるのでしょうか。

現在、無断欠席、会費未納のメンバーを抱えるクラブがあるかもしれません。未納者が出た場合、負担金などは他のメンバーの会費で埋めなくてはなりません。そのために信頼関係がうすれ、士気が低下し、疲弊したクラブがあります。これではクラブの姿勢はできません。どの人もクラブメンバーの推薦で入会したわけですから、世間では責任を果たしている人には違いありません。クラブに対する思いか、クラブに対する優先順位が低いためでしょう。ルールは、クラブごとに違うでしょうが、どこかで、きちんとするのは、リーダー、役員会の責任となります。

### もったいない退会をなくすため

退会に至る中で、クラブを理解しなかったり、楽しさを見出せなかったり、人間関係などの誤解から、退会する人だけは、なんとか防がなくてはなりません。その数が多いことが問題になっているのです。

それでも、いくら退会の理由を後から調査しても、対策は立てにくいのです。交通事故の場合であれば、事故調査によって、信号やガードレール、カーブミラーを設置するような解決方法がとれます。しかし、退会の場合は難しいのです。退会の本当の理由をだれかが聞くことは、大切です。それを胸に刻み、再発を予防しなくてはなりません。

ん。それでも現実には、理由が複合的なケースが多く、仮に分かったとしても、それをクラブ内で公表しない方が良いでしょう。

あえて出来ることといえば、“運転講習”にあたる部分と、日常の接し方をお互いに気づかう部分に限られてしまいます。

やはり普段から、新しいメンバーにいろいろな場に出てもらって、自分で感じてもらい、個人的に説明したり、疑問に答えることが一番重要なことだと思います。少なくとも、入会数年間は、みなで包みこんで、言葉のシャワーを浴びせることが大切でしょう。

私自身は、終わりの日まで、クラブの交わりの中にいたい、クラブを支えるためにささやかでも何かをしたいと思っていますが、残念ながら、やむを得ずということもあるでしょう。そうなれば、次は、名誉ある卒業を選べればと思っています。

### 堂々たる卒業生なくして

4年前、2007年6月末で、甲府クラブの深澤萬民さんが退会しました。私の知る深澤さんは、マスコミ出身である人脈と営業センスを活かして、山梨チャリティーラン実行の先頭に立っていました。初めて会ったとき、「山梨チャリティーラン担当」と大きく書いた名刺をもっておられました。富士五湖クラブの設立のときは、すでに病でつらかったのでしょうか、何度も何度も甲府から峠を超えて、富士吉田に通っていました。突然の退会のように思えたので、手紙を出し、返事をいただきました。理由は体調不良でした。同じような内容なので、公表されている甲府クラブブリテン2007年7月号を引用いたします。

「(前略)「ワイズ関係の年中行事はもとより、後半は例会さえも満足に出席出来ないという、ご迷惑を掛けっ放しの惨たんたる有り様でした。いわゆる“Yキチ”の一人と自負する人間が、例会出席もおぼつかなくなった末路は、<クラブを去る>という道しかない、というのが私の出した結論です。日本区が東西に分割される前、1990年は

じめ、会員増強運動のシンボルとして「日本区6000」が強力に推し進められていた1993年10月に入会させていただきました。その当時の甲府クラブは、すでに43年の歴史と、50名を超える会員を誇る日本区でも有数の存在で、40年以上のワイズ歴を持った先輩諸氏が数多く活躍されておりました。当時私はすでに58歳、どうあがいても、先輩たちに追い付くことは不可能であり、あと15～20年のワイズライフ、短くとも長く生きようと心に決めていました。

ところで、甲府クラブ創立の原点は、青少年のためのYMCA会館の建設であったことは有名ですが、市川規一先生を中心とする16名のチャーターメンバーによる情熱と、血の出るような募金活動は実に感動的で、入会時の私の心を強烈に揺り動かしたことを忘れることは出来ません。

さて、私は不幸にしてかけがえのない健康を害し、心身の自信を失ったことで、6月をもって甲府クラブを退会させていただくことにお許しをいただきましたが、このように中途半端な形で愛するワイズを去ることを誠に申し訳なく、残念に思っております。僅か15年足らずの短い期間でしたが、会員一人ひとりに身に余るお世話いただき、心の底から深く感謝いたしております。同時に、クラブを通じて多くの事を学ばさせていただきました。またあずさ部、東・西日本区の皆様にも親しくご交流をいただき感謝のほかありません。私のワイズ歴の中で、忘れることの出来ない思い出は、何といても第10回を数えることができた「山梨チャリティーラン」です。今から10年前、これにかけようと、38年勤務したマスコミを退社し、裏方として10年間支えてきました。県内外の企業、団体、個人、ボランティアの皆さんの温かいご支援のおかげで、山梨YMCAにとって欠かす事の出来ない貴重な事業に成長してきました。もうどなたがやっても何とかなると思います。YMCA、ワイズ運動に共通することは、強い隣人愛、なかんずく、次代の青少年に対しどれだけ熱い思いをもって当るかどうかを尽

きると思います。15年の間に得た私の心からの願いであり、貧しい祈りでもあります。

終わりに、YMCA並びにワイズメンズクラブの一層のご発展と、皆様のご健康を心よりお祈りいたします。」

また、東京山手クラブのブリテン2010年11月号に数年前に退会した筒井康さんの近況が載っていました。

「ワイズメンの心を心として過ごしています」在籍時代は、南東部部長も務め、地域にあっては、子どもたちに剣道の指導に励まれていましたが、仕事をやめ、クラブのない郊外に移住されました。

一昨年、東京八王子クラブを退会した宮崎由喜子さんは、横浜国際大会の夏祭りのためにと、浴衣や帯を友人から集められました。

前に、書いたことがあります。「昔は、大いにやったもんだ。お前さんも、遊んでばかりいないで、そろそろワイズにでも入ったらどうなんだ」と言うご隠居が、あの町、この町にいて欲しいと思います。

「ワイズの心」には定年がありません。「ワイズの心」をもった応援団がいてこそ、強いのです。堂々たる卒業生なくして、堂々たる在校生はあり得ません。

社会環境の変化によって、ワイズライフも変わる可能性があり、今後はますます会員の異動も増えてくるでしょう。

将来、だれが退会する立場になり、だれが引きとめる側になるのかは、だれも分からないのです。攻守(?)ところを変えるかもしれません。

誰しも、退会する権利も退会勧告に従う義務もありますし、クラブを素晴らしくする権利も義務もあります。ならば、クラブと自分のワイズライフを素晴らしくする権利者と義務者が、年々多くなっていくことを願っています。